

若手研究推進委員会 『若手の樹』企画報告

第36回日本看護科学学会学術集会では、全国から集まった研究者と共に『若手の樹』を作りました。看護研究者・実践者が「10年後、20年後、30年後の看護界について描いている夢」を一枚の葉に乗せることで、前向きな明るく大きな樹ができました。多様で個性的な声を、研究・臨床・教育・看護人として・看護全体という5つのBranchにまとめました。



【Branch 1：研究】

研究については、①コラボレーション ②オリジナルな看護 ③社会貢献 ④研究環境という4つの小枝にわけてご紹介します。

①コラボレーション

まずは、領域・分野の垣根を越えた協働という声が多くありました。看護学以外の分野との学際的な研究を行うというのはもちろんのこと、細分化された看護領域を越えた、看護同士のつながりを求める声もありました。次に、実践の学問である看護学であるからこそ、「臨床と大学」「実践と研究」の協働が不可欠だという声もありました。

さらには、研究者という立場の者だけが研究を行うのではなく、「研究参加者」「患者」「高校生」という様々な立場の人々と協働・共同・協同して研究を行うという声がありました。そして、このようなコラボレーションを待つのではなく、若手が創っていききたいという熱意のこもったメッセージが寄せられました。

②オリジナルな看護

既存の枠組みを越えていく、組み替えていくようなオリジナルな看護を作っていきたいという意見がありました。例えば、それぞれが取り組んでいる課題において“当たり前”“仕方がない”とされ、研究として十分に明らかにされていない事柄について、それを覆すような研究・論文作成をしたいというものです。さらに、アメリカから輸入される看護ではなく、日本から立ち上げていく“日本製の看護”を作りたい、看護から新たな研究分野を創造していききたいという、刺激的で心躍る意見がありました。

③社会貢献

研究をただ行うのではなく、その先を見据えた研究を積み重ねていききたいという声が多くありました。例えば、“実践に役立つ・患者さんの為になる”“社会や地域に貢献する”“一般の人にもわかる”など、研究成果をどのように活かしたいかということまでも具体的に描けるような研究にしたいというものでした。

④研究環境

上記のようなことを叶えるために、研究環境を整えていききたいという切実な声がありました。

領域の壁・臨床との間の壁・学問分野の壁がある現状に対して、その垣根をなくして自由な交流や研究活動ができると、看護学の未来がより大きく拓けると展望されていました。

【Branch2：臨床】

臨床については一番多くの声が寄せられました。①現場での研究 ②ケアの質・水準の向上 ③専門性の向上 ④看護師としての目標・理想の看護師像の4つの小枝がありました。

①現場での研究

「Branch1：研究」ともつながりますが、ここでは臨床という立場・目線からの研究についての意見を集めました。大学院を修了し病院に戻ると、日々の実践に追われてしまいがちだが、働きながら研究視点を持ち続け、それを実現できるような看護師や病院が増える未来が挙げられていました。同時に、病院で働く看護師が、研究に対して難しさを感じずにどんどん着手できる時代になること、看護研究者が臨床に所属できるようになること、臨床看護師・大学教員・研究の3足のわらじも履けるようになるという声もありました。

研究者の立場からも、臨床看護師の立場からも双方を自由に行き来できるような環境が求められていることがわかります。看護管理などを専攻している若手が、このような改革に取り組めるといいですね。

②ケアの質・水準の向上

現場での研究活動を充実させたいという声は、ケアの質・水準の向上ともリンクしています。すべての人に一定水準のケアを提供できるように、大病院だけではなく中小規模病院がレベルアップして看護をボトムアップさせたいという声や、エビデンスを踏まえたケアが定着するようにや、都会一地方という枠組みによって受けられるケアの質がかわらないようにしたいという声がありました。それにより、患者の”安楽”の尊重など看護の本質を見つめなおし、患者が心身ともに元気でいられるような治療・療養環境にしたいということが目指されていました。

③専門性の向上

現場で働く認定看護師・専門看護師からも熱いメッセージが寄せられました。まずは、認定看護師や専門看護師が何をする人で、どのような専門性を携えている職種であるのかを、院内・院外も含め広く認知されるようにしたいという意見がありました。その存在が周知されることにより、全ての病院に看護外来ができ、多職種連携をより図ったり、患者のニーズにこたえられる体制を作っていきたいという声がありました。さらに、看護師の存在が病院や施設を選ぶひとつの基準になるほど、看護師が専門職として確立できるようにしたい！という夢が描かれていました。

④看護師としての目標・理想の看護師像

最も多かったのが、理想の看護師像や看護師としての自分の目標についてでした。理想の看護師像のキーワードとして、「丁寧に人と向き合う」「患者家族に寄り添う」「語りを聞くことができる」「楽しく情熱ある」看護師になりたい・ありつづけたいたいという、看護本来のあり方が掲げられていました。こうありたいけど、そうではない現状にジレンマを感じている様子

が行間にもじみでていました。

看護師としての自分の目標としては、それぞれの専門分野を極めたい、病院だけではなく社会に根付かせたいし自分も看護師として根付きたいというものから、看護師が自分の意見を述べられる職場を作りたいという管理的な側面、患者さんがその人らしく、自由に生活できる未来をつくりたいというケアの本質を実現させることまで幅広くありました。

【Branch 3：教育】

看護教育については、教える立場である“看護教育者”と、“看護教育体制”というシステムについての2つの視点からの意見がありました。

①看護教育者として

どのような学生を育てたいかという点について、自分で考えられる・根拠をともなった意見が言える・人をいつくしむ看護の本質を忘れないような看護師を育てたいということが挙げられていました。そのために、教える立場として自身も看護について学び続け教育に取り組みたい、学会などにも積極的に参加して自己研鑽を積みたいという声がありました。

②看護教育体制

卒業までに臨床で働く具体的なイメージがつくように、実践的な学習を積む時間の必要性を訴える声がありました。それに関連し、看護教育機関として大学がスタンダードになる、さらには4年制ではなく6年制になると良いのではないかと、看護師教育全体の変革を望む意見もありました。

さらに、看護学という学問体系については、他分野と同じように博士課程修了が当たり前となり、学問の質の向上を目指したいという声もありました。そのためには、実習を含む教育に多くの時間をとられている現状を見直し、教育と研究のバランスがとりやすい環境を、今後作っていく必要があると多くの人感じていました。

【Branch 4：看護人として】

看護に携わる“看護人”としての、人生の目標・活動目標が高く掲げられていました。

①看護界を変える

看護師ひとりひとりと、看護界全体を変えていきたいという声が多くありました。例えば、自信と誇りをもって看護ができるようになり、世界に日本の看護が通用する次世代を作りたいし、それに向けてがんばりたい。そのために、個々の看護職が教育・研究・実践を担う力を身につけ、夢や目標をあきらめず一生働き続けられる世界にしたい！そして、“看護”を楽しんでいると思っ、続けていくことができるようなシステム、組織作りにたずさわっていけるようになりたいという熱い思いが寄せられました。

②人生の目標・職業人としての活動目標

自身の目標としては、研究者としての自立・臨床と研究の架け橋になる・国際的に活動するといったものや、一人が多職種を担うような“看護師+α”を実現したい。それに向けて、毎

日を大切に頑張り、つながり、学びを拡げていきたいという声がありました。進学についての声も多くあり、博士号取得をまずは目指し実現させていきたいという、現在進行形の皆様からの身近で大事な目標もありました。

③ワークライフバランス

常々あがっている声ですが、仕事と自身の生活との両立についても切実な意見がありました。その代表が、子育てしながら自由に仕事ができるように、負い目を感じることなく働けるようになりたいという声でした。とかく、自分自身へのケアが疎かになりがちな私達ですが、からだも生活も人生も大事にできる職業環境を整える重要性を、若手から再発信していきたいですね。

【Branch 5 : ×看護】

最後に、看護が何かに対してこのように働きかけたいという意見を、看護が社会に向けてという「看護×社会」、看護が看護に対してという「看護×看護」という2つの視点からご紹介します。

①看護×社会

社会へのアピールとして、看護が担っている役割を示し、人々の期待にこたえ、他領域や一般市民、社会全体から理解され認められるような未来を作っていきたいという意見がありました。それによって、看護学を学びたいと、優秀な高校生に思ってもらえるような学問にしたいという、次の看護学の発展を見据えた声がありました。

②看護×看護

看護に属するものとして、このよう看護であって欲しいという意見も多くありました。例えば、看護の本質を大事にし続ける職能であって欲しい・若い看護師が現場を変えていけるような柔軟な組織にしたい・男性看護師も同じく活躍できるような環境であってほしいという声がありました。また、看護の地域間格差をなくしたい、安心して病む・老いることができるような社会を看護からつくりたい、さらには世界中の看護師が知を共有して楽しく働けるようにしたいというメッセージがありました。